

| | |
|--------------|---|
| Title | 第二言語ライフサイクルの縦断データにみられる日本語の変異と変化 |
| Author(s) | 黄, 永熙 |
| Citation | 阪大社会言語学研究ノート. 2019, 16, p. 128-141 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/73644 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

第二言語ライフサイクルの縦断データにみられる

日本語の変異と変化

黄 永熙

【キーワード】 韓国人帰国生日本語、第二言語ライフサイクル、縦断データ、変異、変化

【要旨】

本稿では、韓国人帰国生の姉妹が言語接触中断後10年以上維持している日本語(以下、帰国生日本語とする)に見られる「存在動詞・可能動詞・アスペクト・否定辞」の変異(標準語形・方言形・非標準語形)の使用実態から、個人のライフサイクルにおける第二言語の変化を考察した。第二言語の維持・摩滅期に標準語形が安定的に使用されるなか、方言形はほとんど用いられず、方言形使用と言語習得環境との相関関係は弱い。そして、年少者のほうが衰退期により非標準語形の使用率が高くなる。また、同様の衰退期日本語として植民地日本語と比べた結果、接触中断時の年齢が方言形の維持と関わっていると考えられる。

1. はじめに

近来、高校で日本語を学んだ韓国人学習者や日本留学後に帰国した韓国人帰国生が一定レベルまで習得した日本語を維持しようとするに関心が高まっている。彼らの維持したり、衰退したりする言語変化のメカニズムと、そのケアを重大な課題としているのが、「第二言語維持」に関する研究分野である。

このように加算的な側面の「言語習得」に焦点が当てられた研究のみではなく、第二言語接触中断以降の減算的な側面の「言語摩滅」まで研究が行われ、より縦断的で包括的な視点から日本語学習者の第二言語変化のプロセスを眺望できるようになった。

しかし、個人のライフサイクルにおける第二言語としての日本語の変化に見られる変異を、統合的に扱った研究はあまり見当たらない。本稿でいう「日本語ライフサイクル(生涯周期)」とは、第二言語としての日本語に関する「習得→維持→摩滅→再習得」という周期のことを指す。経済分野では商品が市場に投入されてから姿を消すまでの流れを表す。もともとは、人生の経過を円環に描いて説明したもので、商品を生物にたとえた表現である。「導入期」→「成長期」→「成熟期」→「衰退期」という4つの段階をたどるとされる¹⁾。この定義を参考にし、ある一人が第二言語を習得・維持・摩滅していく過程において第二言語に商品としての言語経済的価値を与えると、その習得・維持・摩滅過程の繰り返しがライフサイクルと類似しており、個人の生涯における第二言語接触者のL2の意味や変化プロセスを理解しやすいために援用する。

1) デジタル用語辞典 (<https://kotobank.jp/dictionary/ascii/>)

本稿では、長期間の日本滞在後、帰国した韓国人児童に残されている日本語を対象に「第二言語の習得・維持・摩滅・衰退」段階における変異の特徴を考察した。本稿のように現在の韓国人日本語学習者に対して10年以上の長い間にみられる、日本語変異の変化メカニズムを実証している研究は管見の限り見当たらない。

しかし、日本語衰退のケースは日本語話者の数ほど多様に存在すると予測される。以下では、帰国生、留学生、駐在員などが日本語接触中断後、維持している日本語を「帰国生日本語」とする。帰国生が経験するのは韓国語と日本語の接触だけではない。日本のどこに住居したかによって、日本語の中でも「標準語形」と「方言形」の接触がありえる。それとともに、日本語学習者に多く現れる、規範的日本語の使用から逸脱した「非標準語形」も垣間見られる。例えば、「有情物主語の存在文でイルの代わりにアルを使用したり、可能表現でラ抜き言葉（派生動詞の過剰一般化）を使ったり、アスペクト表現で過去形を代用したり、否定形の活用を誤ったりすること」などは日本語学習者もよく犯す誤りである。

本稿のインフォーマントは日本滞在中、東京で存在動詞の標準語形イル・アルと、大阪で方言形オルにも接触しており、例(1)～(4)のように方言形式（断定を表す「～や」、否定を表す「～ん」）が習得期に見られた。

(1) A : アジアっていうのはね、ここまでなんだ。ま、いいや。(200711)

(2) A : 分からん。(200607)

(3) B : 人間に化けてくれないとかむんや。(200702)

(4) B : 知らんのか? (200711)

*A (姉)・B (妹) はインフォーマントであり、() 内は録取した年月、詳しい情報は表1を参照。

また、方言形は習得当時の入力(input)過程の影響で帰国生に標準語形の一つとして認識されている可能性がある。第二言語の方言形も含めて習得した日本語の変異が、第一言語が韓国語である環境で長期間摩滅期を経た場合、その変異はどのような姿を見せているだろうか。

二人の帰国生における日本語変異の使用実態から、主にその形態的な変化における特徴を分析する。また、それを同様の摩滅期にある植民地日本語と照らし合わせることで日本語ライフサイクルにおける維持・衰退のメカニズムを明確にする。

まず、§2.では第二言語の維持や摩滅の特色を中心とした第二言語ライフサイクルに関する先行研究について、§3.では調査の概要について説明する。その後、§4.で帰国生日本語の変異の使用実態を確認し、話者別に類型を観察し、植民地日本語と比較しながらその変化と関わる要因を究明する。最後に、§5.で全体をまとめる。

2. 先行研究

2.1. 第二言語ライフサイクルに関する先行研究

1980年代以降、第二言語習得以降に起こる言語変化と関わる研究が始まった。第二言語を忘れていくことをめぐる研究は、言語習得と対称的な視点から「摩滅の順序、リテラシ・

年齢との関係や補充方略」についての実験的検証がその黎明期に当たる (Weltens & Cohen 1989)。

そして日本で帰国子女教育が課題として認識され始めたのは、昭和 40 年代の前半であると言われる (久保 1994)。1990 年代に入り、帰国生の言語問題が注目され、主に青少年の英語能力の変化がそのテーマであった。

例えば小野 (1994) は、英語語彙力は海外での滞在年数、帰国時の年齢や帰国直後の英語語彙力にあまり関係なく、急激に低下する児童・生徒が多いことを指摘している。Tomiyama (2000) はアメリカからの日本人の帰国青少年 (8 歳) を帰国後 4 年にわたって調べ、6 ヶ月を過ぎた時点で衰退の兆しは現れるが、4 年後にも受容能力・産出能力を維持していたと報告している。

一方、韓国人の帰国生日本語に関して金 (2010) は、時間の経過による第二言語 (流暢さ、語彙、助詞) の変化を観察し、日本語の知識と運用能力が徐々に低下し、発話を産出するに時間がかかるという摩滅のプロセスを指摘している。

しかし、これには日本語の文法範疇に関する観察が抜けており、帰国前後 1 年半までの記録であり、帰国の以前と以降のライフサイクルにおける連続的で長期間の実証的研究とは言えず、比較的短期間の言語変化を人為的な調査を通して調べたものである。

本稿で取り上げる帰国生日本語は、言語習得終了時点における話者の日本語能力のみならず、その前後の 10 年以上の習得・摩滅過程を知ることができる。

以上、帰国生日本語に関する研究だが、本稿では帰国生日本語と植民地日本語の対照も行なう。第二言語としての日本語の衰退については、近年になって英語圏の日本語学習者や台湾・旧南洋群島に残存する日本語を対象に研究が進められるようになった (Hansen ed.1999、Hayashi1999、Tomiyama2000、渋谷 2001、簡 2004、松本 2013)。後者は、第二言語が 50 年以上衰退されず、再構成されている例として取り上げられた。

韓国の植民地日本語については、現在維持されている第二言語の体系そのものに関する記述として言語摩滅の観点から包括的にまとめた木口 (2004)、言語維持の視点から韓国の言語習得環境と話者別変異の関連性をまとめた黄 (2009) を除くと、ほとんど研究が行われてこなかった。長期間にわたる調査の難しさから、ある個人の第二言語習得以降の実態を観察している研究は少ない。

2.2. 第二言語ライフサイクルにおける第二言語の特徴

維持されている言語や摩滅していく言語に共通して見られる言語面の特徴は、「①弁別する音の数が減少すること、②形態カテゴリや異形態が減少すること、③語彙数が減少すること、④意味と形式が一对一に対応する透明な構造・単語が多くなること」などが挙げられる (Dorian1973・1981、Anderson1982)。

そして、渋谷 (1995) は旧南洋群島パラオに残っている摩滅期の日本語について、「①丁寧体の使用が少ないという文体面での単純化、②文末詞の使用が少ないという談話管理面での単純化、③マセンよりナイデスを用いたり、キットにより蓋然性を表したりする分析化、④文末詞ヨネ、否定辞マセン、ワカラナイネなどのチャンク (定型表現) の使用、⑤受身・

使役など複雑な構文の回避」という5つの発話構造の特徴を挙げている。

また、Tomiyama (2000) では「母語の転移」も維持または失われていく第二言語を補う方略のひとつであるとされる。なお、黄 (2015) では中国朝鮮族の植民地日本語（存在動詞・可能動詞・アスペクト・否定辞・条件形式・文末形式の変異）を対象に日本語とどのように接触したかによる変異形の使用状況の違いを考察した。その考察から韓国人日本語学習者の日本語維持メカニズムには主に「単純化、分析化、母語転移」が背景にあることを指摘した。

以上、第二言語ライフサイクルにおいて摩滅期にある第二言語の特徴としては「単純化、分析化、母語転移」が主な変化の要因として挙げられる。

3. 調査の概要

本稿では、帰国生日本語の変異について、話者による違いを整理し、そのバリエーションの中に規則性を見出すことを試みる。そのため、話者が維持する変異の実態について理解能力と使用能力を網羅的に引き出すことのできる、次のような調査をデザインした。

帰国生などのように個人における第二言語ライフサイクルに関する研究を行うためには、数十年にわたってその言語生成の様相を継続的に観察しなければならず、なおかつ「自然な会話資料」から検討することに意味がある。

筆者は、およそ10年前から第二言語としての日本語の〈習得・維持・摩滅・衰退〉のメカニズムに関する疑問を解くため、韓国語と日本語のバイリンガルである韓国人姉妹の自然談話を長期間採集してきた。本稿のデータは、日本語接触の以前と、それが中断された以降、およそ10年間に見られる言語データである（詳しくは3.1節を参照）。

録音資料は、韓国人帰国生の日本語を「韓国→日本→韓国」という言語環境の変化にそって継続的に記録したものであり、第二言語としての日本語の習得とそれ以降の日本語接触中断による「維持・摩滅・衰退」、そして「再学習」というライフサイクルの全体像をみることができる。つまり、インフォーマントの第二言語ライフサイクルの各段階を対比的に考察することによって、分析対象としている言語変異の変容と、その要因を検証することができる。

3.1. インフォーマント情報

インフォーマントは、帰国生の姉妹でA（19歳：1999年生まれ）と、B（18歳：2001年生まれ）の二人である。韓国語母語話者の両親と日本の東京や大阪で6年間、居住しながら現地の初等教育を受けたが、韓国に戻ってから10年が経っており、現在は日本語能力の衰退を経験している。

日本に滞在していた2008年7月（Ⅰ期：習得期）までに日本語を習得し、韓国に戻ってきた帰国生（A：小学校3年生、B：小学校2年生）は日本語との接触環境がなくなっから、2009年2月（Ⅱ期：維持期）まで韓国の小学校に設置されてある〈帰国子女班〉に通いながら日本語を忘れつつあった。その後、2011年8月（Ⅲ期：摩滅・衰退期）まで韓国語へモノリンガル化していった。その間は、日本語との接触をもうけないようにしていた。そ

れ以降、話者 A は 2015 年 3 月、話者 B は 2017 年 3 月から高校に進学（Ⅳ期：再学習期）してから再び日本語を学習している。

以上を概略すると、A と B はⅠ期の間日本語を習得し、韓国語ではなく日本語ベースで話すことが多かった。Ⅱ期には日本語ベースを維持し、Ⅲ期の前半には日本語ベースから韓国語ベースに移り変わり、Ⅲ期の後半になると日本語の使用がなくなった。このように日本語習得から衰退まで、第二言語ライフサイクルの変化を見せる二人の情報を、時期別〔Ⅰ期（習得期）、Ⅱ期（維持期）、Ⅲ期（摩滅・衰退期）、Ⅳ期（再接触期）〕に分けて示すと、次の表 1 のとおりである。

表 1 インフォーマントの情報

| 時期 | 居住地域と期間 | 学歴情報 |
|------------|--------------------------------------|----------|
| Ⅰ期（習得期） | ①ソウル（A 0y:0m-2y:0m, B 0y:0m-0y:7m）* | 韓国居住 |
| | ②東京と横浜（A 2y:1m-4y:6m, B 0y:8m-3y:1m） | 日本居住 |
| | ③大邱（A 4y:7m-4y:10m, B 3y:2m-3y:5m） | 韓国の幼稚園 |
| | ④大阪（A 4y:11m-5y:1m, B 3y:6m-3y:8m） | 日本の幼稚園 |
| | ⑤大邱（A 5y:2m-5y:6m, B 3y:9m-4y:1m） | 韓国の保育園 |
| | ⑥大阪（A 5y:7m-8y:9m, B 4y:2m-7y:4m） | 日本の小学校 |
| Ⅱ期（維持期） | ⑦ソウル（A 8y:10m-9y:4m, B 7y:5m-7y:11m） | 韓国の小学校 |
| Ⅲ期（摩滅・衰退期） | ⑧ソウル（A 9y:5-15y:3m, B 7y:12-13y:10m） | 韓国の小・中学校 |
| Ⅳ期（再学習期）** | ⑨ソウル（A 15y:4m～現在, B 13y:11m～現在） | 韓国的高校 |

*（ ）内は、インフォーマントの居住期間（A[姉]、B[妹]、○y:○m[生後年月]）を示す。

** 自発的な発話がなくなったため、①2016年11月、②2017年3月に行った調査文調査である。

3.2. 談話情報

分析の対象になる言語データは、2006年9月（A 7y:11m, B 5y:6m）に正式な録音を開始し、2011年8月（A 11y:10m, B 10y:5m）まで二人の会話を録音したものである。2008年7月に韓国に帰国する直前から2009年12月まで4回、絵本を見ながら日本語で語った言語データ（金 2010）も含まれる。

談話データは、ウチという空間的環境の中で心理的状态の変動が少ない場面で収録した。姉妹同士または家族の混じった（二人が遊んだり、寝る直前に話し合ったりするときの）会話場面で収録ができた。その際、両親は日本語を使わず、ほとんど韓国語でコミュニケーションをとっていた。

今までの先行研究では、主に発話を操作した談話、朗読、調査文の読み上げなどを通じてデータの採集が行われてきたが、本稿の談話データは姉妹二人か家族間のみで行われた会話で使われた、もっとも自然な日本語を録取したものである。

そして、帰国して6ヶ月が経過した2009年1月の調査以降は、自然会話がほとんど韓国語ベースになっており、8ヶ月が経過した2009年3月の調査のインタビューでは日本語の誤用の例も現れ始める。また、帰国後17ヶ月が過ぎた2010年1月の調査からは韓国語と

日本語の混合もみられるようになる。

なお、表1〔④～⑧〕の5年間、集めた録音データは1149分、約19時間に当たる。全調査期間中3ヶ月ごとに1時間の会話を収録したことになる。収録時間・文字数を考慮に入れた談話量の時期別割合は、「8（Ⅰ期）：3（Ⅱ期）：3（Ⅲ期）：4（Ⅳ期）」（四捨五入）になる。ここに金（2010）の収録データの時間は含まれていない。

3.3. 分析方法および対照資料

Ⅰ期からⅣ期までの時期別に録音資料を文字化した後、韓国語と日本語の使用の様相を綿密に検討しつつ、コーパス化した。そして、Ⅳ期には日常的に自発的な日本語の使用がなくなったため、四つの言語項目が入った翻訳式調査文調査を通じて話者が意識せずに自動的に産出できる形式は何か、つまり話者が目標とする規範形を調べた。

また、インフォーマントが滞在期間中に（主に小学校低学年の時に）書いた作文資料なども傍証として取り上げる。なお、文字化作業における誤謬の確認と、規範判定は長年日本語教育に従事している日本語ネイティブ教師に協力してもらった。

同じく言語衰退の状況に置かれている成人層の対照資料（植民地日本語：韓国・中国）の詳細については、紙幅の都合上、割愛する。黄（2015）を参照されたい。

3.4. 調査項目の妥当性

本稿では韓国人帰国生の第二言語ライフサイクルにおける日本語の変異の縦断的变化について考察する。本稿で具体的な調査分析対象としている「存在動詞・可能動詞・アスペクト・否定辞」がなぜ帰国生日本語の変異の変化のあり方を見るために適切な言語項目であるのかについては、以下の三つの理由を挙げることができる。

- (a) 「存在動詞・可能動詞・アスペクト・否定辞」は、（標準語形を含めて）多様な変異形を有し、標準語形と方言形の接触現象や習得後のバリエーションの変化をみることができる。しかも他の要素に比べて使用頻度が高く、談話データから豊富な用例数が得られる。
- (b) 言語習得終了時点（＝2008年）以降、日本語と接触していないインフォーマントを選出したため、方言形は2008年以前に習得されたものといえる。このため、習得終了以前に習得された言語項目の維持のあり方をみることができる。また、学習者戦略による非標準語形の変化も観察できる。
- (c) 学習者日本語の方言的要素の変化を捉えた先行研究はあるものの、研究の数はそれほど多くはない。現在の日本語学習者を対象としている先行研究を見ても標準語形と方言形の接触まで考慮に入れた研究は多くなく、特に上記の言語項目は第二言語習得分野でも未だ研究データの蓄積が多くない点から対象項目として妥当性を持つ。

以上のように、帰国生の多様な言語データにみられる変異形から、その動的な変化のメカニズムを検証する。

4. 分析の結果

まず、4.1節では「存在動詞・可能動詞・アスペクト・否定辞」について、話者ごとに標準語形と方言形、非標準語形に分け、その使用実態を捉える。4.2節では、話者ごと、時期ごとに、変異の〈維持・摩滅・衰退〉の様子を日本語接触度と結び付けて分析する。最後に4.3節では日本語習得環境（地域・学習歴・年齢・職業歴）が異なる衰退期の植民地日本語と対照した考察をする。

4.1. 話者別変異形の使用実態

分析対象となる各言語項目を大きく「標準語形、方言形、非標準語形」に分け、変異形の使用割合を話者別・形式別に示したのが、次の表2～表4である。

まず、標準語形の具体的な例を提示すると、㉑存在動詞は有情物主語文でイル（イルデス・イマス）の使用数、㉒可能動詞は派生動詞類（一段・カ変動詞＋助動詞ラレル、五段動詞の派生可能動詞）とデキル類（スルコトガデキル、動名詞＋デキル）の使用数、㉓アスペクトはテイル（テル、テイマス、テマス）の使用数、㉔否定辞は「動詞＋ナイ」の使用を標準語形として設定した値である。それぞれの代表形を括弧内に示している。

表2 話者別標準語形の使用実態

| 言語項目 | | A | B |
|------|-------------|-----|-----|
| 標準語形 | ㉑存在動詞（イル） | 89 | 45 |
| | ㉒可能動詞 | 105 | 36 |
| | ㉓アスペクト（テイル） | 217 | 154 |
| | ㉔否定辞（ナイ） | 286 | 167 |
| | 使用数 | 697 | 402 |

そして方言形の具体的な例を提示すると、㉕存在動詞は有情物主語の方言形オルの使用数、㉖可能動詞の方言形には「五段動詞＋助動詞レル（例：書かれない）」を含む²⁾。㉗アスペクトの方言形テオルはテオリマスの使用数（ただ、*話者Bの3例は方言に由来するものではない）、㉘帰国生日本語に否定辞の丁寧体ンデスの使用は見当たらない。それぞれの代表形を括弧内に示している。

表3 話者別方言形の使用実態

| 言語項目 | | A | B |
|------|-------------|---|----|
| 方言形 | ㉕存在動詞（オル） | 1 | - |
| | ㉖可能動詞 | 1 | 2 |
| | ㉗アスペクト（テオル） | - | -* |
| | ㉘否定辞（ン） | 4 | 3 |
| | 使用数 | 6 | 5 |

2) 日常生活で日本人と接触する過程で獲得した要素としての性格が強いと判断した（黄2007）。

また、非標準語形の具体的な例を提示すると、①存在動詞は有情物主語にアル・ナイ・モツなどの非規範的な述語が使用された数である。ただ、そのうち、アルの使用が可能である（一定の属性をもつ種類の存在を表す）部分集合の用法は含まない。①可能動詞にはヨク構文、派生動詞の過剰一般化（一段・カ変動詞の派生可能動詞：ラ抜きことば）、動詞基本形に代用した場合の使用数が含まれる。㊸アスペクトの使用数には「動作継続」「結果状態」用法からの逸脱とテンスの逸脱を含む。㊹否定表現には「動詞・イ形容詞・ナ形容詞+ナクテ・ナイデ」などの誤用数が含まれる。

表 4 話者別非標準語形の使用実態

| 言語項目 | | A | B |
|-------|-----------|----|----|
| 非標準語形 | ①存在動詞（アル） | 5 | 7 |
| | ①可能動詞 | 12 | 16 |
| | ㊸アスペクト | 10 | 15 |
| | ㊹否定辞 | 3 | 2 |
| | 使用数 | 30 | 40 |

なお、非標準語形の使用実態については言語形式面だけではなく、言語機能面も考慮しなければならず、（非規範的な使用に対する）判断が難しいため、その種類と使用に対しては明確に逸脱だと考えられるもののみを筆者が判断した。それぞれの代表形を括弧内に示している。

表 2・表 3・表 4 の表示は、それぞれ次の事項を意味する。

- (1) 標準語形は、話者 A > 話者 B の順に多く、非標準語形は話者 B > 話者 A の順に多いことから年長者が年少者より正確な日本語を習得・維持しているといえよう³⁾。
- (2) 方言形は、話者 A > 話者 B の順に多いが、年長者と年少者間の差はそれほど大きくない。

4.2. 時期別にみる変異形の変化

4.1 節では、話者別・言語項目別の変異形の使用状況の全体像について述べた。ここでは、2008 年 7 月に帰国した以前と以降に分け、日本語接触度（年齢⁴⁾）という因子に焦点を当てつつ、変異形の出現状況の変化について述べる。

標準語形・方言形・非標準語形の時期別出現数を示したのが表 5～表 8 である⁵⁾。

- 3) 発話数において話者 A が話者 B より多いことも考慮に入れるべきであるが、それにもかかわらず話者 B の非標準形が多いことは大きな特徴としていえる。形式的なことは次節で詳しく見る。また、例文を通じた詳細な考察は各言語項目に該当する参考文献を参照されたい。
- 4) 二人の姉妹は日本語の接触開始と帰国時期が同一であるため、話者 A が年長者、話者 B が年少者になる。
- 5) 具体的な言語項目は、表 2～表 4 と同様である。ⅡⅢ期の談話量を 1 とした場合、Ⅰ期は 2.7 倍、Ⅳ期は 1.3 倍のデータ量になる（3.2 節の談話情報を参照）。

表 5 存在動詞の時期別使用数

| 話者と時期 出現語形 | A | | | | B | | | |
|---------------|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|----|
| | I | II | III | IV | I | II | III | IV |
| ㊤標準語形 (イル) | 17 | 12 | 49 | 11 | 11 | 8 | 9 | 17 |
| ㊥方言形 (オル) | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| ㊦非標準語形 (アル) | 3 | 1 | 1 | - | 2 | - | 1 | 4 |
| 使用数 | 382 | 129 | 98 | 88 | 271 | 53 | 28 | 50 |

表 6 可能動詞の時期別使用数

| 話者と時期 出現語形 | A | | | | B | | | |
|---------------|----|----|-----|----|----|----|-----|-------|
| | I | II | III | IV | I | II | III | IV |
| ㊧標準語形 | 51 | 20 | 5 | 29 | 19 | 3 | - | 14 |
| ㊨方言形 | 1 | - | - | - | 2 | - | - | - |
| ㊩非標準語形 | 2 | 3 | - | 7* | 1 | - | 1** | 14*** |
| 使用数 | 5 | 1 | - | - | 6 | 2 | - | - |

*クレル・ミエル、**デナイ、***カキル・ウタレル・アシレル・フレルなどの誤りである。

表 7 アスペクトの時期別使用数

| 話者と時期 出現語形 | A | | | | B | | | |
|---------------|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|
| | I | II | III | IV | I | II | III | IV |
| ㊪標準語形 (テイル) | 133 | 55 | 18 | 11 | 113 | 25 | 12 | 4 |
| ㊫方言形 (テオル) | - | - | - | -** | -* | -* | - | -** |
| ㊬非標準語形 | - | 3 | 3 | 4 | - | 2 | 3 | 10 |
| 使用数 | 6 | 8 | 5 | 11 | 4 | 3 | 5 | 28 |

*I期(1例)、II期(2例)に話者Bが使っているテオルは方言形に由来するものではない。
**IV期のアスペクトには翻訳式調査の結果も含まれる。

表 8 否定辞の時期別使用数

| 話者と時期 出現語形 | A | | | | B | | | |
|---------------|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| | I | II | III | IV | I | II | III | IV |
| ㊭標準語形 (ナイ) | 181 | 42 | 26 | 37 | 128 | 17 | 7 | 15 |
| ㊮方言形 (ン) | 4 | - | - | - | 3 | - | - | - |
| ㊯非標準語形 | 1 | 1 | 1 | - | 1 | 1 | - | - |
| 使用数 | 6 | 8 | 5 | 11 | 4 | 3 | 5 | 28 |

文脈上、変異の解釈が難しいことがあるため、非規範形の設定という側面からの類型化への試みには限界もあるが、表 5～表 8 の時期別の変異形の使用数から言語項目別に次のようなことが分かる。

- (1) 【存在動詞】話者 A・B は標準語形イルを使用し、方言形オルは使っていない。衰退期に話者 B の非標準語形アルが増えるが、IV期にイルもよく使われている。
- (2) 【可能動詞】話者 A・B に標準語形が多いが、I 期に方言形も見られる。IV期にな

るほど話者 B に非標準語形の使用が多くなる。

(3) 【アスペクト】話者 A・B に標準語形が多いが、IV期になるほど話者 B に非標準語形が多くなっていく様子が見られる。

(4) 【否定辞】話者 A・B で標準語形ナイが無標 (unmarked form) 形式として使われており、方言形シの使用はなくなっていく。ただ、I 期に方言形を自発的に導入している例が見られることから、使用場面がなくなるとともに産出できなく/しなくなっていると言えよう。やはり方言形の維持度は極めて低い。

上記の表 5～表 8 を、時期ごとの発話量 (I 2.7 : II 1 : III 1 : IV 1.3) にあわせて調整し、より分かりやすく図式化したのが下の図 1～図 3 である。

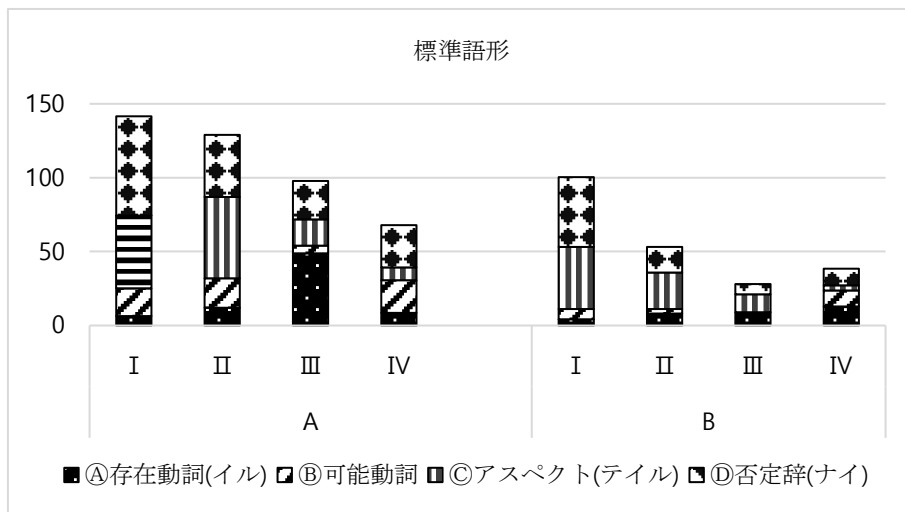


図 1 標準語形

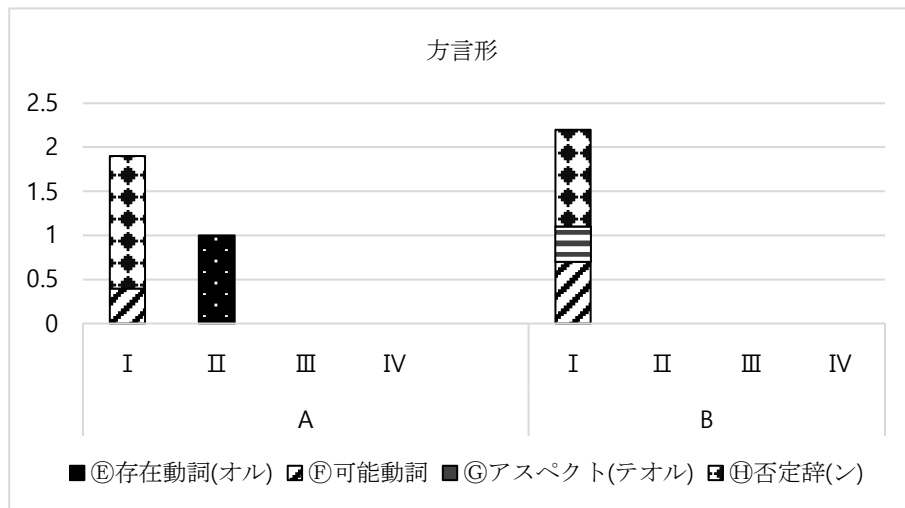


図 2 方言形

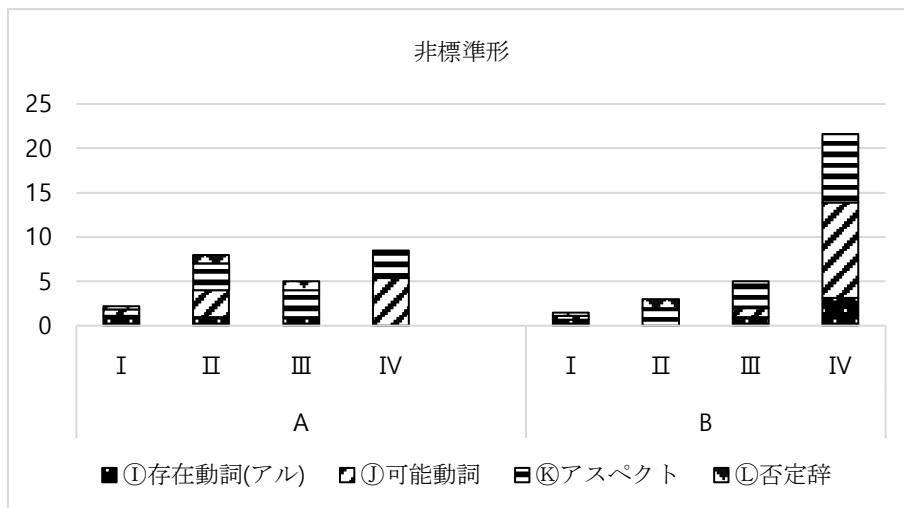


図3 非標準語形

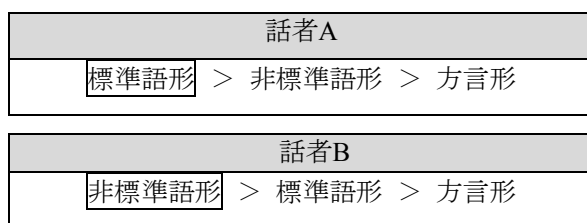


図4 変異形の出現頻度

図1～図3の第二言語ライフサイクル（I～IV期）を変異形使用の変化という側面から見ると、話者Aと話者Bは図4のように分けることができる。つまり、いずれも方言形が導入されなくなるなかで相対的に「話者A：標準語形の維持度（高）、話者B：非標準語形の増加度（高）」のようにまとめられる。これは「主に年齢による言語接触度の差」という社会的属性と関係があると考えられる。

以上、話者A・Bはともに第二言語としての日本語が衰退していくが、話者Aに固定的な標準語形の使用がより長く残っているのが特徴である。それに比べて、話者Bは非標準語形の使用が多くなっていく。その背景には、言語衰退期によく見られる「単純化・母語転移」が要因としてあると考えられる。ただ、以下4.3節の成人層の衰退していく日本語によく見られる、「分析化」はそれほど目立たない。各言語項目について具体的な分析内容は参考文献の拙稿（黄2018a・2018b・2018c・2019）を参考されたい。

4.3. 摩滅期の植民地日本語との対照

今まで述べてきた帰国生による変異形の使用状況を、同じく第二言語摩滅期にある成人層の植民地日本語と照らし合わせる。各々の標準語形と方言形の使用実態を比較したのが表9であり、これを分かりやすく図式化したのが図5である。韓国・中国のデータは、それぞれ拙稿（黄2009・黄2015）による。これらの日本語接触中断の平均年齢は、16歳と14歳である。また、話者A・Bの日本語、すなわち表9の「帰国」については、植民地日本語の

表 9 否定辞の時期別使用数

| 言語項目 | | 帰国 | 中国 | 韓国 |
|------|--------------|------|------|----|
| 標準語形 | ㉠存在動詞 (イル) | 4.8 | 2.6 | 8 |
| | ㉡可能動詞 | 3.4 | 12.8 | 14 |
| | ㉢アスペクト (テイル) | 5.7 | 24.6 | 24 |
| | ㉣否定辞 (ナイ) | 6.5 | 13 | 26 |
| | 使用数 | 20.4 | 53 | 72 |
| 方言形 | ㉠存在動詞 (オル) | 0 | 1.8 | 1 |
| | ㉡可能動詞 | 0 | 0.4 | 1 |
| | ㉢アスペクト (テオル) | 0.1 | 0.8 | 14 |
| | ㉣否定辞 (ン) | 0 | 0.4 | 1 |
| | 使用数 | 0.1 | 3.4 | 17 |

*具体的な言語形式は、表3・表5と同様である。㉠～㉣、㉠～㉣の使用数は、一人当たりの使用数(全体使用数÷各地域の話者数)であり、帰国の場合は談話時間と発話量を考慮し、均等に割った数字である。

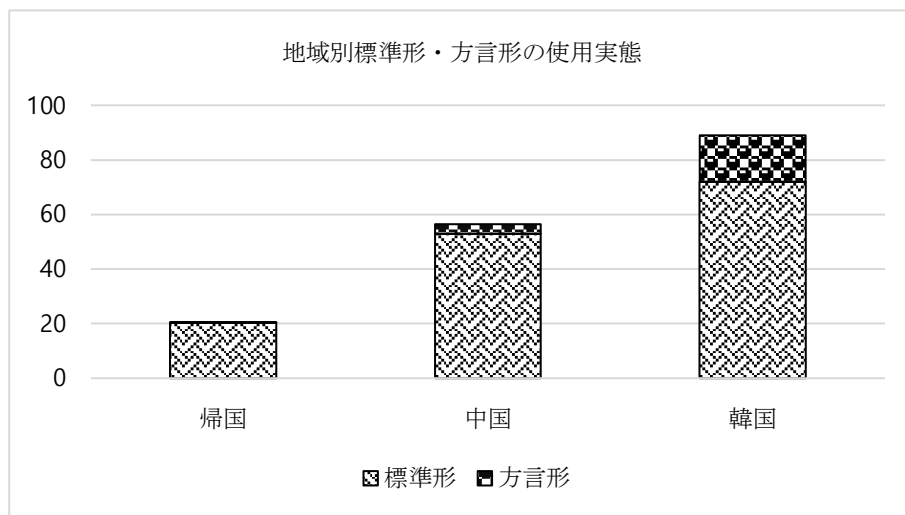


図 5 地域別標準語形・方言形の使用実態

データにあわせ、Ⅱ期(維持期)以降のデータのみを示す(小数点以下、四捨五入)。

表9と図5に見られる表示は、それぞれ次の事項を意味する。

各グループごとに出現する変異からは、次のような対応関係を導き出すことができる。つまり、第二言語摩滅期における地域別標準語形と方言形の使用実態から、「韓国・中国」に比べ、「帰国」は方言形の使用がなく、標準語形のみを使用している。

なお、帰国生日本語は日本語接触中断時点が、2008年で中断期間がより短いものの、その退行度が激しい。このことから、日本語の標準語形はもちろん、方言形の維持には接触中断時の年齢が要因として働いていると考えられる。

5. 終わりに

今まで韓国人帰国生の第二言語ライフサイクルにおいて、習得中断後、忘れていく日本語のうち、「存在動詞・可能動詞・アスペクト・否定辞」の文法的変異形の使用実態を通して、主に「日本語接触時の年齢」と第二言語変化の関連性を調べてみた。

一定レベルの日本語能力を習得していたと考えられる帰国生は習得当時、変異の一種として方言形も使用していた。その日本語を同じく方言形をも使用していた経験を持つ植民地日本語の変異（標準語形・方言形）の出現状況と比較してみると、習得環境よりは「接触中断時の年齢」が摩滅期の日本語変異の変化に影響を与えていることが分かる。それと同時に非標準語形の変異は、第二言語ライフサイクルにおいて忘れていく言語一般に現れる、第二言語習得過程の鏡像として理解できよう。

以上から、第二言語習得時の接触度や第二言語接触中断時の年齢が第二言語の維持と正の相関関係にあると言えよう。

【参考文献】

- 小野博（1994）「帰国子女のバイリンガルの能力の保持」『日本語学』13-3, pp.4-12, 明治書院.
- 簡月真（2004）『台湾に残存する日本語の実態』大阪大学大学院文学研究科 博士論文.
- 木口政樹（2004）『韓国における残存日本語の摩滅に関する研究—「韓国人高齢者コーパス」の分析を通して—』韓国中央大学校大学院 博士論文.
- 金昴京（2010）「帰国子女の日本語の維持と摩滅」『日本語学』2-14, pp.183-195.
- 久保真季（1994）「帰国子女教育の現状」『日本語学』13-3, pp.4-12, 明治書院.
- 渋谷勝己（1995）「旧南洋群島に残存する日本語の可能表現」『無差』2, pp.81-96.
- （2001）「パラオにおける日本語残存の実態—報告書:序章—」真田信治（編）『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』科学研究費補助金特定領域研究（A）「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」成果報告書, pp.285-302.
- 黄永熙（2009）「第二言語習得環境による第二言語保持の類型—韓国高年層日本語の変異を対象として—」『日本言語文化』14, pp.279-298, 韓国日本言語文化学会.
- （2015）「韓国人日本語学習者の第二言語保持メカニズム—日本語接触の類型による変異形—」『日本語教育研究』31, pp.273-291, 韓国日語教育学会.
- （2018a）「韓国人帰国生日本語の存在表現に関する縦断的考察」『日本語学研究』56, pp.139-156, 韓国日本語学会.
- （2018b）「韓国人帰国生日本語の可能表現からみる第二言語接触史」『比較日本学』42, pp.387-410, 漢陽大学校日本学国際比較研究所.
- （2018c）「日本語否定表現の変異形からみた第二言語接触の歴史」『日本語教育研究』45, pp.215-229, 韓国日語教育学会.
- （2019）「日本語アスペクト表現の習得、維持、摩滅、喪失そして再構成」『日本語学研究』59, pp.209-226, 韓国日本語学会.
- 松本和子（2013）「パラオ日本語の語用論的変異と変化」岡村徹編『オセアニアの言語的世界』pp.220-262, 溪水社.

- Anderson, R. W. (1982) Determining the linguistic attributes of language attrition. Lambert, R. D. & Freed, B. F. (eds.) *The Loss of Language Skills*, pp.83-118, Rowley MA: Newbury House.
- Dorian, N. C. (1973) Grammatical change in a dying dialect. *Language* 49. pp. 413-438.
- (1981) *Language death: The life cycle of a Scottish Gaelic dialect*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hansen, L. (ed.) (1999) *Second language attrition in Japanese contexts*. New York; Tokyo: Oxford University Press.
- Hayashi, B. (1999) Testing the regression hypotheses, the remains of the Japanese negation system in Micronesia. In Hansen, L. (ed.) *Second language attrition in Japanese contexts*. pp.154-168. Oxford University Press.
- Tomiyama, M. (2000) Child second language attrition, A longitudinal case study. *Applied Linguistics* 21(3), pp.304-332.
- Weltens, B. & Cohen, A. D. (1989) Language attrition research, *An introduction. Studies in Second Language Acquisition*11, pp.127-133.

ふあん よんひ (韓国 漢陽サイバー大学副教授・大阪大学大学院修了生)